

Title	<Book review>Ernest Mortensen and Ervin T. Bulland, Handbook of Tropical and Sub-Tropical Horticulture, Washington : Department of State, Agency for International Development, 1964,260 pp
Author(s)	佐藤, 孝
Citation	東南アジア研究 (1968), 6(2): 464-464
Issue Date	1968-09
URL	http://hdl.handle.net/2433/55499
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

る。農民の経済行動の分析は、またひじょうな注目に値しよう。第3は、そのさいの村落外部条件の作用の仕方である。こうした自給自足を主とする村落経済にさえ外部条件がいかに強烈に作用するかは、こんごの開発政策に重要な示唆を与えるであろう。

農業開発論の視点からの私の紹介は、文化人類学者のそれとは異なるであろう。文化人類学の立場からいって、本書はアジアの水稲栽培についての最も詳細な記述のひとつであろうし、また Lue 人について欧文で書かれた最初の研究であろう。さらにタイ研究としても、最近の最大の収穫だと思われる。

私はこれだけの業績をしあげられた Moerman 博士に心から敬意を表するとともに、いまさらながら東南アジア研究にかんするアメリカ側のいちじるしい発展に驚かされるのである。(本岡 武)

Ernest Mortensen and Ervin T. Bulland.
Handbook of Tropical and Sub-Tropical Horticulture. Washington: Department of State, Agency for International Development, 1964. 260 pp.

著者は AID に関係する前はいずれも農業教育に従事した人である。AID その他から熱帯亜熱帯地域に派遣されて豊富な経験をもつが、派遣地に東南アジアは一国も含まれていない。

本書は AID 関係や平和部隊として海外に出てゆく人のために書かれたもので、農業専門家でなくても理解が出来るように平易に書かれている。10章からなるが、主体は第2章の果樹およびその他の木本性作物と第3章のそ菜に関する章である。収録された果樹およびその他の木本性作物は71種で、そのなかにはカカオ、コーヒー、ココヤシ、アブラヤシ、ゴム、チャ、コシウ等の工芸作物が含まれている。そ菜は41種で、なかにゴマやリョクトウ、キャツサバ等が含まれているが、東南アジアの市場に多くみられるヘチマやトウガン、レイシ、ササゲ、エンサイ、コエンドロ、各種のアブラナ科のそ菜類等はなく、欧米人の好むどちらかといえば熱帯では高級そ菜に属するものが多い。書名が示すとおり便らんであるので各作物についての記述は極めて簡単であり、読んでいて興味がわいてくるというものではない。

深く学びたい場合は各作物のあとに挙げられている文献によって適当な本を探ることが出来る。農業指導者として熱帯や亜熱帯の低開発国にいった場合は、専門外のことでも本書に収録されている程度のことはいちおう理解しておく必要があるだろう。また熱帯農学を初めて学ぶには、一般に、概論から入ってゆくのであるが、この際沢山でてくるききなれない熱帯作物の数々を一つ一ついろいろの本を繰り広げて調べていては誠に不便であり、また各作物の記述があまりにも詳しいと本論の概論がいつこう進行しないことをしばしば経験するものであるが、このような場合にも本書は役立つだろう。ただ、東南アジアの農業に関係する者にとっては、もっと東南アジアに多い作物を取り入れてほしかったが、それは東南アジアを知らない著者達の経歴からみて無理からぬことであろう。(佐藤 孝)

歴史・文化・考古学文献出版委員会編『アユタヤ時代古記録集成 第1冊』 Bangkok, 1967. iii+118 pp.

คณะกรรมการจัดพิมพ์เอกสารทางประวัติศาสตร์วัฒนธรรมและโบราณคดี ประชุมจดหมายเหตุสมัยอยุธยา ภาค ๑

同委員会編『アユタヤ時代寺領・寺院奴隷寄進文集成 第1冊』 Bangkok, 1967. iv+84 pp.

ประชุมพระตำราบรมราชทูตเพื่อกัลปนาสมัยอยุธยา ภาค ๑

1767年に行なわれた、ビルマ軍のアユタヤ攻撃によって、アユタヤ時代の記録文書の大部分が散逸してしまったことは広く知られている。信憑性の高いタイ語史料の決定的不足は、アユタヤ史を志す歴史学徒の前に立ちはだかる高い壁である。こうした研究上の障害は、これまでもっばらヨーロッパ語および漢文史料の利用によって克服されようとしてきた。しかし一方、タイ国自体においても、戦火を免れたタイ語史料探索の努力が、まったくおざりにされていたわけではない。すでに前世紀の末葉以来、ダムロン親王ら歴史学者の手によって、細々ながら古